なっきょん's CLUB がゆく！

ぶらり散策ガイド

入江泰吉記念 奈良市写真美術館

大学のある高畑町は、かつて志賀直哉が暮らすなど文化人や芸術家などが集まっていた芸術に彩られた町です。光明皇后が建立した新薬師寺などもありとても落着いた雰囲気を感じさせます。今回はそんな高畑町にある入江泰吉記念奈良市写真美術館を訪れました。

入江泰吉記念
奈良市写真美術館
学芸グループ
木村真士さん

〈リポート〉
学生広報スタッフ
『なっきょん's CLUB』
学校教育教員養成課程1回生
（奈良県立登美ヶ丘高校出身）
原 佑輔さん

大学の正門から外周に沿って北東方向へ歩くと住宅街にガラス張りのきれいな建物を見つけることができます。そこが入江泰吉記念奈良市写真美術館です。

この美術館は、奈良の写真家として名をはせた入江泰吉氏から作品を寄贈された奈良市が開館したもので、入江氏の作品を中心に写真展示やイベントが行われています。

今回は、同館学芸グループの木村真士さんに案内していただきました。

奈良を愛した写真家 入江泰吉

――入江泰吉記念 奈良市美術館は、いつごろできたのですか。

建設の話は1983年に遡ります。その年、入江泰吉・光江夫妻のお祝い会が奈良県知事や奈良市長らも出席して盛大に開かれ、当時の唐招提寺長老であった森本孝順師がお祝いを述べられたなかで「入江さんの作品を保存し奈良のために役立てるべきだ。そのために県や奈良市が保存し公開する施設を建ててはいかがか。」といった趣旨の発言をされました。会場からは賛同の大きな拍手が起こったといいます。このことがきっかけで写真美術館建設が動きだしました。実際に建設が始まったのは1990年7月11日で、開館は1992年4月13日でした。

写真美術館建設にあたって、入江氏は自身の全作品を著作権とも奈良市へ寄贈されました。作品を寄贈するケースは珍しくありませんが、著作権も寄贈するケースは極めて稀です。

――入江泰吉さんとはどのような人だったのですか。

入江氏を知る方やお弟子さんの話では、普段は優しく気さくでいつも微笑んでいるイメージだったそうです。しかし、いざ撮影に入ると、声もかけられないほど近寄りがたい雰囲気に満ちるそうです。それほど一つの作品を創るのに集中し撮影していました。薬師寺元管主・故高田好胤師は「入江さんはジキルとハイドのようだ」と、表現しています。

また、大変な勉強家で、時間が空くとあらゆる書物をメモ用紙と広辞苑を傍らにおいて読み、作品につながることをメモされていたそうです。

――入江作品の特徴というのはあるのでしょうか。

入江作品（カラー風景作品の場合）の多くは「入江調」と評される作風です。自然現象や季節の移ろいを利用し、作品に独自の空気感を取り込んだものです。入江氏は奈良大和路を写真で表現するのに、過剰に鮮やかな色彩は不必要と考えていました。そこで、雨上がり、霧や靄が立つ頃、夕暮れ時、季節では早春、晩秋をねらって撮影し、大和路の深く重い歴史や無常の世界観を表現しました。

また、撮影スタイルとしては、とにかく〝待つ〟写真家でした。目の前にあるものを撮影するのではなく、自身が頭の中で思い描く情景になるまで待って撮影するスタイルです。そこには一切の妥協は無く、一日中待っても シャッターチャンスがこなければ撮影はしない方でした。

入江泰吉記念 奈良市写真美術館
奈良市高畑町600-1　電話：0742-22-9811

【アクセス方法】
◆JR奈良駅・近鉄奈良駅から、市内循環バスで「破石町（わりいしちょう）」下車、東へ徒歩約10分、新薬師寺西側。
◆本学正門から、外周に沿って北東方向へ徒歩約10分。

入江作品で日本人の心のルーツを探る

――建物がすごくユニークですね。どのようなコンセプトで建てられたのですか。

まず、設計は世界的建築家の黒川紀章（くろかわきしょう）氏です。設計コンセプトは「歴史（伝統）と現代の共生・自然と建築の共生」がテーマとなっています。新薬師寺の隣ということもあって、その歴史的な景観を損なわないよう、屋根には瓦が葺かれています。建物の構造は、展示室や事務所など機能の大部分は地下に埋め込まれており、地上の外壁はガラスで覆われているため、瓦屋根がぽっかり浮かんで見えます。また、地下のギャラリーに面して水田をイメージした庭を設け、自然光を採り入れています。

――どれくらいの写真を所蔵されているのですか。

入江作品は8万点以上収蔵しています。大半がフィルムで収蔵しており、カラー約6万点、モノクロ約2万点です。ジャンルは風景、仏像、伝統行事、万葉の花、大阪時代の文楽に大別できます。入江作品の他には、明治・大正時代に活躍した古美術写真の先駆者・工藤利三郎（くどうりさぶろう）の作品約1300点（内、ガラス乾板1025点は2008年に国登録有形文化財に登録）や奈良県出身で全国の風景や自然を撮影している津田洋甫（つだようほ）の「四季百樹の詩」100点を収蔵しています。

――本学に隣接するということで、大学生向けの活用方法などがあれば教えてください。

まず、入江泰吉作品を通して奈良大和路の風物を感じとってもらうことです。そこから、入江氏の作品制作過程に不可欠である奈良の歴史や日本人の〝心〟のルーツを考えるきっかけにしていただくことです。入江作品には奈良（日本のふるさと）の全てが詰まっています。

その他には、写真関係資料や仏像・古社寺に関する資料が数多く揃う資料閲覧室を多くの学生に活用して頂きたいです。

――今後、どのようなものを企画されていますか。

今年度展開する企画展としては、9月4日から11月14日まで開催する「平城遷都1300年記念 入江泰吉傑作選 ―大和路― 後期」展をはじめ、奈良の古跡・古美術を詠んだ歌人としても知られる會津八一と親交があり、多大な影響を受けた奈良の写真家（工藤利三郎・小川晴暘・入江泰吉）を取り上げて、奈良をどのように写真で表現しようとしたのか紹介する「工藤利三郎・小川晴暘・入江泰吉 ―會津八一と奈良の写真家」展などを開催する予定です。

写真美術館で「撮りかた」を学ぶ

訪れた日、奈良市内では、ちょうど奈良公園一帯を燈花で飾る「なら燈花会（とうかえ）」が開催されていました。同館でも入口付近に燈花が並べられ、「燈花会in写真美術館」が開催され、同時に「夕景・夜景の撮りかた講座」も開かれました。

講座には、自慢のカメラや三脚をかかえた写真愛好家の方々が集まり、講義を聞いたあと、実際に屋外に出て撮影実習が行われました。

日の入りを迎え、うっすらと西の空が紅色に染まった頃、ほのかにやさしく燈花が並びます。そんな燈花を多くの写真愛好家が一眼レフカメラでパシャッと狙うと、まるでひとつひとつの燈花が華やかなモデルとなって凛とたたずんでいるかのようでした。

奈良を愛し続けた入江泰吉氏の作品を観て奈良の移り変わりや、逆に変わらない部分の良さを、ここ入江泰吉記念奈良市写真美術館で見つけてみてはいかがでしょうか。

「夕景・夜景の撮りかた講座」

撮影実習

燈花（原さん撮影）